●２００７年
２月１１日（日）
AM9:00～PM17:00

こころの分科会１

● 場　所
第５研修室

コーディネーター：黛　　徳男氏
小児科医　みどりクリニック院長　　鈴木　基司先生
くりこま高原自然学校校長　佐々木　豊志氏
：参加者は、１０代の学生の方も沢山参加。
バラエティーに富んだ参加者となる。
まずは、講師の方の活動を話して頂きました。
（鈴木氏）小児科医であり、メンタルヘルスのクリニックを開業。外来は、300 件～400 件受けている。
（佐々木氏）幼児キャンプからスタート。野外の２週間キャンプに不登校の子が体験後、保険室登校出来るようになり、キャンプ仲間が出来て高校受験できた。
これをきっかけに、不登校・引きこもりの寮をつくるようになった。
これから、多くの寮生は、幼児期の成育環境に課題が多いと気づいて、幼児教育が大切だと考えている。
（佐々木氏）
１．医療の現場から
最近発達障害の子が増えているとは、本当か？
（鈴木氏）増えているとは、一概に言えないが、将来増えていくだろう環境が、今の時代にある。
問題児と言われている子の内訳は、
・７割がいわゆる『いい子』。
そして、この７割のうちの１割弱がトゥレット障害。
（脅迫観念などあったりする。学校では『いい子』だったりする。）残り２／３は、過剰適応の『いい子』、後、１／３は、外で『いい子』で家庭内では反抗する。
・２割（軽度の発達障害児…知能は問題ないが人との関わりに不具合のある人）
２．今は『いい子』が危ない。
一般的な＜発達の概念＞の考えが行き詰まってきている。
今までの『発達』とは…「社会的自立（適応）が目標」
『依存・甘え』は、人間の特徴なのに、幼少期にこれを体験できてないと、他者に関わりながら頼って社会出来ている事を実感できない。
大人の目が届く期間が長いとすぐ注意されるから、
『依存・甘え』がだせない。ケンカもするチャンスが今はない。臨床だけの限界を感じることはある。
（黛氏）壁にぶつかる体験が、『依存』を克服する体験となりうるのか？
（鈴木氏）自然体験は、誰かに見せたりではなく、どうにもならない体験が『過剰適応』に水をかける事になると思う。がやれば好いという物でもない。個人差の問題と見る事も大切。体験の後のフォローが大切。
：この話の中で脳『前頭前野』と心の発達との繋がりの話にも及ぶ。佐々木氏からも、発達には、臨界期やｼｭﾀｲﾅｰ教育の考え方の話がでる。
（佐々木氏）いい子には、公務員に多い気がする。
参加者の子供たちは、『前頭前野』が動いてない気がする。
ただ、２週間のキャンプでこども達は自分で考えるようになり、目も生き生きして明らかに変わっていく。
１.自閉症の受け入れを始めて思う事。
教育―福祉―医療　の横の繋がりがない。
２.受け入れる為の支援の仕組みを作っている。
一つに、自閉症児のお母さんに『サポート』ブックを作ってもらう。→（目的）情報の共有化…その子の行動特長と、起こりやすい状況や要因を考えて書いてもらう。
＊これは、施設・教育の現場・キャンプどこででも共通で活用できる方法。
：ｼｭﾀｲﾅｰ教育の臨海期を見て、おなかに居る１０ヶ月がとても大切。幼児期の体験を重要と考える佐々木さんは
『森のようちえん』を毎年開催。
佐々木さんは、他分野の人と繋がる事で新たな道を探り続ける、3 年に一度開催している 2012 年の『アドベンチャーセラピー国際会議』を日本で開催する事を目標にしている。と語る。
（鈴木氏）今、問題なのは『交流の質』に問題が出ている事。
自分の中にも、自分の世界に閉じこもる時はある。
夢中になっている時＝興味がある事をしている時。外部情報処理能力は、落ちる。（声を掛けられても聞こえない等。）
精神障害を自分の問題として引き寄せ捉える事が大切。

～　これから大人が出来る事・意見交換会～

（黛氏）問題を抱える子達に対する具体的対応はどうしているか？
（佐々木）現場で思考錯誤している。その子を受け入れるかどうかスタッフと相談したり基本的には、やってみる感じで受け入れている。
（黛氏）自分も冒険的要素が強いキャンプなどをやってきた中である少女の話。『学校へ行くか行かないか悩んでいた、今までの私は、バカみたい』と言った。死ぬか生きるかの体験からでた言葉。それは、どう思いますか？
（鈴木氏）今まで、想定内で生きられたのに、想定外の体験から『価値観』の展開となったと思う。が、誰にでも、当てはめて好いかはわからない。昔は、自然に想定外の体験出来た。今は、自然発生的に想定外を体験出来ない。大人が意識して作ってあげないといけない時代なのかもしれない。自然体験は、意識的に体験できる事の一つ。
（黛氏）群馬は、新任先生の研修に『冒険プログラム』を始めた。冒険的自然体験をすればするほど、心が豊かになると研究結果が出ている。
（佐々木氏）大人も同じだと思う。冒険とは？？と言われたら何を想像しますか？そこにキーワードの意味がある気がする。
（参加者）安心じゃないとこ。不安な事。ドキドキする。非日常。発見。未知。危険。克服。創造性が刺激される。
（佐々木氏）それを体験することで得られるモノが教育。子供にとっては、遊びその物が冒険。毎日が冒険。今、親にしちゃいけないと言われるとそれを体験した気になってやろうとしない子がいる。

●２００７年
２月１１日（日）
AM9:00～PM17:00

こころの分科会２

（参加者）一人で居たい子は、どうしたらよいか？人との関わりが面倒。アプローチの仕方は、ありますか？
（佐々木氏）入りたがらない原因が、障害のせいかどうか？
仲間がいないと、出来ない体験をしたことない子かも。
今までそれで生活出来てしまった。自分の限界を体験してみる事で、人なんて関係ないって言葉がでなくなったりする。
（鈴木氏）子供への対応で共通に言える事は、『関わり合いたくない考えもある。』事を、まず受け入れてあげる。みどりクリニックで対応する臨床心理士には、関わらなくてもいいと言う人と、『でもね…』という人もいる。複数で連携して子供に対応する事。いろんな意見を聞かせてあげる。
（黛氏）自分の所では、キャンプファイアーを遠う巻きに見てる子が増えやめた。少人数のグループファイヤーに切り替えた。その中で自分がキャンプで嫌だった事を話してみんなで嫌な気持を共有してあげると、次第に大きい人の輪にも入れるようになって行ったりする。
（佐々木氏）子供の話を聴くことが出来ないと関わるのは、難しい。聴くには、三段階ある。ミラーリングする。（ひたすら聴く。２週間ぐらいつづける）アスキングをする。（お互いの価値観の違いを知る。ズレを知る）その後、ヒアリングで、それはどうゆうこと？？じゃあどうしたい？という聴き方に変えていく。
（鈴木氏）こだわり傾向のある子・執着傾向がある子は、完璧主義に陥りやすい。
まずは、受け止められる事が必要な子供がいる。
日常生活は、一番それが出来にくい場である。だが重要！！
他人と共感体験した上で、やっと前向きな話が出来る。
（参加者）子供を『見守る』と言う事の意味の分からない親がいる。無関心の親・心配性すぎる親。
どう対応したらよいか？
（佐々木氏）無関心の親は、完全に預けっぱなしの人が居る。
キャンプ参加・自然体験をもっと一般化させて行く必要がある。この活動がまだマイナーである。
（参加者）親にキャンプ体験させる事はあるか？
（佐々木氏）『森のようちえん』は、親子で参加。
親が自然体験の楽しさをしらないと子供も体験する前に嫌がったりする。
（黛氏）ファミリーアウトドアスクールを開いているが、お父さんの薪割り姿を見て感動する事はよくある。
大人の体験も必要だと思う。
（佐々木氏）周りの大人が『感情』に対して自分の感情表現と言葉が一致していると、子供は、そういう表現が出来る力を育む事が出来る。
（黛氏）福祉大での生徒に、人間関係プログラムをやるようになって（２泊３日）だいぶ効果を感じている。、
生徒達が子供達とコミュニケーションがとれるようになった。
：佐々木氏から、ラブラトリーメソッド・ＰＡ等の体験プログラムが不登校等のこども達に効果があると言う体験の話がでる。学校にも有用であると語る
（佐々木氏）学校の先生も心理系のエンカウンター等体験するとよい。聴いた事は、忘れやすい。見た事は、覚えやすい。
やった事は、理解出来る。気づいた事、発見した事は、その人の身に付く。本質的には、自分で考えて自分で決めて自分で自分の身を守る。自分で考える時間を与えて上げる。失敗を大人が受け入れたり、出来ない事を出来ないと言ってよいと受け止めて上げる。学校の悩みは、時間がないから指示型になってしまう。
（参加者）学校で、体験学習まで担うのは、理想だけど現実としてどうなのか？？
（黛氏）文部科学省が学校教育に体験学習を組み込む事を考えている。既存の授業の導入には失敗した。その反省のもと、体験学習を外部に委託する事を考えている。
学校の教育活動に組み込む考え。実現には、数年後になるだろうが。では、今、どうするか？？
（佐々木氏）フリースクールを色々見てきたが、学校批判になってしまっている。今日のように、学校やお医者さんなどと繋がることで自分がやれる事が見えてくる。相手がいるから、自分が見える。繋がっていく事が大事。今日は、学校の先生方が参加してくれて嬉しい。
（黛氏）学校の体験学習の依頼は、あるが予算の関係でまだ数は、少ないが。
尾瀬校では、今、ＰＡ（プロジェクトアドベンチャー）を体験させてるらしいがどうですか？
（参加者）体験している学年は、まとまっている気がする。
辞める子が多かったのが、減った気がする。体験していなかったクラスは、今でも雰囲気が悪い気がする。（笑）
（佐々木氏）体験学習プログラムをやって、今の課題が見えれば、いい。すぐに結果がでなてもよい。
ＰＡは、グループの成長過程をみる５段階ある。
ストーミング・フォーミングを繰り返し、パフォーミング、トランスウォーミングに成長していく。
（参加者）親だけで担おうとする考えじゃなく、周りの力を借りるという考えで、いろんな体験を子供にさせるようにさせている。
（黛氏）私たちが、未来のこども達とどこに向かっていったらいいか？自然体験が子供に好い影響があることは、明らかになってきている。
（佐々木氏）いつもこれでいいのか？？と思いながらやっている。それぞれが自分の分野だけでは、限界を感じて居ると思う。
最近の課題は、新しい方法で問題解決していくしかなのかなと感じている。異分野と繋がりながら、探っていくしかない。
：佐々木氏からのメッセージ。ＯＢＳのクルトハーンの言葉。
『大人の考えを子供に強いるのは、誤りで
いろんな体験をさせるのは、大人の義務。』
ニート、不登校、ひきこもり等の言葉は、状況を現す言葉。
言葉のせいで偏見をもたれてしまう。本質の問題がどこかに消えてしまうとある外国人に言われた。
（黛氏）今まで、見えてこなかった事が見えてきた。
子供には、受難の時代。国にまかせている段階ではない。
協力しあって、こども達がノビノビと出来るようになるとよいなぁ～と思います。（レポート　ｸﾞﾘｰﾝﾈｯﾄ　宮岡　えり）